



アナルコ・フェミニズム

—資料編—

〔資料Ⅰ〕

皆さん お元気！

私達はアナーキズムこそフェミニズムの論理的に整合した政治的表現だと思ふ女のコレクティヴです。

私達は女ひとりひとりが自分虐げられている状況を正當に発言できるのだと信じています。女は誰にしろ、どんな「政治的」かわかりを以前もっていたかいないかにかかわらず自己の被抑圧を親しく熟知して居、それについて熱烈に語るのだから、自分の解放はどんな形をとるかはつきりさせるし、またそうしなければならぬのです。

なぜ多くの女は「運動」に疲れ嫌がるのだらうか？

私達の答では、欠陥は運動の性質にあり女ひとりひとりにあるのではないのです。政治運動は、よく判っているように、私達の政治活動を個人的な解放の夢想からひき離し、私達が不可能だとして夢を捨てるか、自分の夢に固執して運動からドロップアウト（離脱）するかのどちらかになる。眞のアナーキストとして、また眞のフェミニストとして、私達は言おう。不可能を取て夢想しよう。不可能が実現するまで決して落着かないようにしよう。

女性解放運動には重要な二形式がある。その一つは小さな、地域的、意志的に組織された自覚グループです。これは良くて個人レベルでの被抑圧者を取扱うのに極く適した意義のある形式ですが、悪くすると自覚的小グループのレベルを克服できないのです。

別の重要な参加形式だと大きな集権的グループで、その活動は特殊な政策にあてて行われ、女性の被抑圧を具体的で単一なプログラムに翻案しようと苦勞するのです。このタイプのグループにいる女性達は、しばしば紋切型の左翼政治にまきこまれ、しかも他の左翼グループ内の性差別に我慢できなくなる。けれど左翼男性の態度に反対はしても形式的な方針に従う多くの女性達は、圏外にいる女達のいわゆる「小教グループ」のやっтерることが真理だと思ひながら兎角、男性指向のマルクスレーニン主義の（トロッキスト、毛沢東主義等）境界内に留り、自分達が抵抗を覚える左翼男性グループの扱う政治組織形態と言葉を活用しつづけます。こうして左翼老年のエリート意識と中央集権は女性運動の相当部分を毒しました。それは幾つかの単純化したプログラムをめぐって運動を「構築」しなければならぬとする政治的な詭弁となりまた「われわれは大衆の意識が、われわれの水準に向上するまで待とう」という態度になるのです。「被抑

圧者の彼女に、あなたは抑圧されているですよと教える態度をとるなんて：それにあなたの意識はポチポチ成長するのだから一つの政治目標から次の目標へと辿って行くべきだと教えるなんて：なんと傲慢なんですよ！

過去一〇年またはもっと以前には、左翼女性は全女性が被抑圧グループにいるこの明白な事実を無視して、私達自身の解放のために闘うべきだと絶えず強迫しました。私達は数が多く散らばっているから「自分の男」や父、また主人と同じ階級に基礎を置く特殊階級の成員だと思いついていました。だから左翼女性は自分を被抑圧女性としてより中産階級の女だとして、自分自身の闘争を第一義的闘争として闘うことをしなかったのです。それどころか他の被抑圧者の為に闘うことに献身して、自己の立場から自己疎外したのです。多くの人はもうこんな態度は女性運動にはなく、それは白人中産階級男性のあやまちだったとする。けれど今日ですら自治的女性運動内部の女達は、もう私達がその水準を乗り越えたとして、組織の必要を語るのです。私達が自己解放を第一義的に強調するからといって、被抑圧の姉妹を無視するのではない。そうではなくてすべての解放闘争にとって真実な事柄は、自分自身の被抑圧を先づ認め直接それ进行处理することにあるのです。

意志的に組織、維持しそしてその成員が蒙っている抑圧を明確にし、自由にむけての闘争はどんな方式をとるべきか等に動くべきです。

新左翼とマルクス左派の女性オルグは革命へむけ大衆動員の視点をもっている。けれど私達は、女ひとりひとりが闘争に加わることが革命だと断言します。わたし達が革命なのです。

社会が私達にどう振舞うべきか教える行動についての規制を打棄て、衝動によって行動するのを学ばなければならぬ。私達はある運動の会員であると考えるのをもうやめて、個的革命者として共働しましょう。二人、三人、五人、また一〇人のさような個的革命者がお互いに親しく知り合い信頼するなら、私達の革命的行動が実践でき、自分達で政策を決定するでしょう。指導者のいない親和的グループの会員として、各会員は平等に力を持ち、タテ組織の権力機能を否定しよう。ボスはみんなやつつける：です。さすれば指導力によって運動はどの進路をとるべきかを決定する運動などで踏み迷うことはないでしょう。私達が運動です。私達が自己の運動の方向をきめます。私達は指導されたり言いつけられたり冷遇されるのは拒否します。

なぜアナーキズムか？

私達はマルクスレーニン主義の分析と戦術を拒否するのが、政治的無知だと決めつけられはしないのを信じます。私達は政治的無知とは「民主的に集権化」されたグループが私達のための前衛代弁者だと思いつくことだと信じます。「構築」運動にかかづらうグループの本質は、(1)「実際」的要求に対し「更なる」極端な夢を流しこみ、その結果(2)管理機関になるのです。そんなのはご免です。

近代のらじかるな歴史を通じて、マルクスレーニン主義の理論と実践に対抗した全く別のらじかるな伝統がある。バクーニンからクロボトキン、ソフィベロフスカヤ、エマゴールドマン、エンリコマラテスターを経てムーレイブクチンに至るもの、それがアナーキズムです。それが多くのらじかるな人びとに親しまれないのは、高度に組織された国家とマルクスレーニン主義諸団体によって、組織的に歪曲され誤り伝えられているからです。アナーキズムは無責任と混沌の同義語ではないのだ。事実、アナーキズムは諸他の左翼の時代遅れの組織論、政策決定手続に代る重要な構造的代替えを提供するので、アナーキストの基本的組織形態は小グループであります。

自発性と直接行動を！

さて皆さん(TOLKS)、今もある人達が断言するよう、女性運動の分裂は私達の革命的有効性に終りをもたらす：とは私達は思いません。絶対に否です。女の精神が「運動」によって指導されたり管理されるにはちょっと大き過ぎるだけなのです。自己に動きかけ自己の行動を決定する小グループこそ革命的女性の必然的構造的な表現です。これは勿論、色々なグループが色々な計画や会議で共働しないというのではない。私達は他の女性と接触を断ちたいとは希わない。それどころかケンブリッジ在の女性センター内に自治的コレクティブを組織しつつあるのです。この女性センターは基本的には連合媒体として機能するものであって、政策決定グループではなく色々な女性グループの会合センターとして機能します。また小刷子を出したい時に出すつもりです。皆さんのご意見を聞かせて下さい。

一九七二年三月

黒ばらアナルコフェミニスト内、小さい赤いバラ及び黒いマリアイ

想像力に力を！

〔訳註〕この呼びかけは一九七二年四月ニューヨーク市

で開催された集会で発表された。この集会の成果は各地に点在する個人、グループとの連携を深め、アナルコフ・フェミニストの綱を作ったことだと言う。また、住所録を作成し、各人は週末を利用して住所録記載の各地各グループと討論したり食事を共にして過すそりだ。

〔資料Ⅱ〕

アナルコ・フェミニズムは

何を意味するか

それは女性としてわたし達が女性解放運動によって認められているように、不正義、不平等、女性を侮辱し、げすむものを確認することを意味します。

それはわたし達が次のことを確認するものです。性差別は加虐的国家の一部であるが、女性是人種差別、戦争、刑務所、階級闘争等の問題から離れてはいけないうのであって、特に官僚制と権威主義のあらゆる形態を注視したいと思うのです。人種差別と性差別は国家の枠外でも存在するでしょう。けれどそれらは一つの国家が別の国家に置き換えられても、例え「革命的」国家だと偽るものによっても決して解消しません。わたし達は国家の抑圧から自由になった人びとに解決方法を求め、その人が女

だからと言って女性立候補者を支援するのではなく、いわゆる「民主的手続き」の構造を問題にします。それ故わたし達の闘争は、女としての自己確認がすべての個人にとつての自決を求める希望と同一であることを認め、それを維持しようとするのです。つまり強制はそれが肉体的、心理的なものを問わず、いづれも革命的とは考えません。

それはわたし達がアナキスト女性として、知識の道具、姉妹愛、行動によって強化するのを意味します。

それはわたし達が産児制限、環境保全、反戦等の分野で自己表現と政治的行動を求め、また各自は自己が最も効果的に活動できるとする問題を取扱い、自分のやりたい仕方であるのを選びとることを意味します。

それはわたし達の方法が「指導者」や「スター」の型式を含まないのを意味します。わたし達の決断は集約的自由意志です。同意しないグループまたは個人は彼女の選択した道を行く自由があります。わたし達は絶対的に、人間の社会的、性的、政治的自由意志の集団を信じます。そこで女は確固として自己を保持し、他の女と密

接な関係を持ち、お互いに話し合い、学習し、愛し合

ねばなりません。けれど女は、特に両性の相互利益をもたらす関係があるにもかかわらず、お互いに圧力を加えて男性との性的政治的関係を断つてはいけません。わたし達は革命的女性が革命的男性に背をむけるのは愚かなことであり、それは制度化された人種差別または組織化された戦争を故意に無視するのと同じだとします。

それはわたし達が他の男性達にある性差別に直面している男性を勇気づけ支持するのを意味します。今、多くの男達は女の運動に口先だけの支援を与えています。けれど性差別が冗談やちょっとした批判の形で表われる時他の男の性差別に立向う男性は少ないのです。

それはわたし達がこれから遠い道のりを歩まねばならない事実は理解しているとして、女として抑圧されるのは許さないので意味します、けれどわたし達は人類が鎖につながれているのを知っている。五〇年前、エマ・ゴールドマンはそれを言ったのです。「真の解放は、投票場や法廷で始まるのではない。女の魂の中で始まるのです。女が自分の自由は自分の力で達成する範囲まで自由なのだ」と知ることは重要です。」

一九七三年二月

―社会革命アナキスト連合―

タクソンアナルコ・フェミニスト

〔資料Ⅲ〕

アナルコ・フェミニズム

根源的にフェミニストの解放を確認する政治・社会思想はアナキズムだけである。マルキストや他の左翼思想は大衆の解放に主軸を置き、それが個人の解放になるとする。ところがアナキズムは個人の解放を主軸とした革命過程を視点として、社会の解放を目指すのである。自己、または各個人が、大衆の解放を達成する前に解放されなければならない。この事は過去において黒人、貧者、また夫の解放にエネルギーをそそぎ、自己の被抑圧には眼をつむり、自己解放を第二義的にみなしてきた女性において特に真実だ。解放は自己から始めよ、各婦人は自分の生活を管理し、自我（selfhood）を獲得し、その過程の中に社会的解放を取り込むべきである。革命は解放を最終製品として配送するのではない。むしろフェミニストの社会的解放は、その革命の過程の中で有機的（連携的）に発生すべきで、それは自我活動、自己表

現、大衆脱却 (demasification) を通じて行われる。

フェミニスト革命は階級闘争ではない。むしろ女性の被抑圧は全階級、価値、制度を貫通して居り、性差別はブルジョアジーと同じく下層階級にも根づいているのだ。マルキストは、性差別が資本家の抑圧の結果だとするが女性抑圧は父系家族制と共に始まり、その更に崩れた形である父系資本主義以前から存在するのである。またマルキスト系フェミニストはフェミニストの被抑圧を階級闘争分析で説明する。すべて女性はプロレタリアートであり、家庭で、事務所で、社会で搾取される労働者だとするのだ。しかしこの説明は非常に単純化されていて、フェミニズムを粗悪な鋳型に鋳込むように思われる。女性には経済力を獲得するだけで解放される望みはない。アナルコフェミニストにとって、闘争は経済的抑圧からのみ生起するのではない。個人が社会的に、人間関係において、制度的にまた経済的に自己を解放しなければならぬ。各人が自己を通して「彼女」や「彼」の生活に満足と意味をみつけるべきである。「文意では「彼女」「彼」とは自分の性別を第三人称で言いかえているから「自分の生活」の意になる」訳註)

アナーキズムの本質はフェミニズムと同じく、各個人

にとって「彼女」や「彼」つまり自己の日常生活を十分に制御し得ることである。アナーキストは自己表現、自発的活動、また多面的総体的な経験を通して自己の (self) の実現にむけ努力する。フェミニスト活動も同じだ。女性には例えば性的表現、強化された個的な異性／同性関係、創造性、また彼女が性抑圧により疎外された環境にむけ制御する経験を通して自己解放に努力するのだ。

女性の解放闘争で直面する重要課題の一つが「力」である。社会性のレベルだと女性には自分の生活を制御するあらゆる分野—政府、制度、社会等で「力」を獲得しようとしている。だが最も達成困難なのは自分達の人間関係で「力」を平等化することである。これは意志決定、金銭の消費に等しく発言でき、性的表現を制御する面が含まれよう。他者に「力」を振うのは抑圧だ。「力」の平等化と自己肯定が必要である。

アナーキズムはすべて強制的な「力」、それが人間関係で、あるいは組織内部のものであろうと、国家権力ともども解体を求める。アナーキストの小グループは理念を分け合い、友情を作りだし、また特殊プロジェクトで共働するために組まれるのだ。だからそうしたグループはゆるやかに組織化され、自分達自身のプロジェクトに深入りしたら、先のグループから別れる。個人はグループから

区別され、彼女や彼は階級的で官僚的な組織の中でたまたま自己の同一性を失うより、自己を保全すべきである。

マルキストが性差別は革命の最終製品とし除去されたと信じるのは、自由主義傾向のフェミニストが女性解放は改善によって達成できると同じく誤りである。白人中産階級の男性が達成しようとしているものでは女ひとりだっただけで解放できないのだ。例えば管理職とか平等賃金は女性に経済的安定をもたらすだろう。けれど女性を官僚的で階級的なビジネスの世界から自由にすることはできず、まして性差別の社会からの解放は望まれないのである。五倍どころか八倍の賃金を貰い、管理職に就いたとして、就業時間は長くなり、女性が自分の創造、自己表現、多面的個性を発展させる自由はそれだけ少なくなるだろう。よくあることは被抑圧者は抑圧者のもっているものを得ようとするのだが、果してわが抑圧者が自由と考えられるだろうか。

家事を分担し子供の保育を分けあうことで結婚における平等が得られるとするのは、女性が自己の個性、創造性、性生活のすべての分野を経験し得るものとして解放されたことにならないだろう。リベラルなフェミニスト達は結婚を信じようが信じまいが、性生活の二面性を理解しはじめている。広い文化受容 (extensive

reculturation) の過程で女性には異性との性生活を規範として受入れ、同性である女性を男を愛するようにつまり全的な性生活を自覚しなくなっている。

いずれにせよ広い視野からすれば、政府自体を廃止しない限り女性には決して本当に解放されないし、自分の生活を管理することもできないのだ。例えばどれ程平等になったとしても現在の政府形態は大衆の望むもの、そしてわれわれみな追従するように言いつける。提案された平等権修正案の場合がよい例だ。それは政府が女性を管理する不条理を示している。それによれば、女性が平等になりたいと思えば、平等に取扱って欲しいと要求すること。また幾つかの州の相当の人びとが女性には平等権をもつべきだと信じるなら、その場合は平等権を持つだろうと規定している。さような修正案の提案は、それ自体で卑下したものである。同じことは中絶法がそうである。女性には自分の身体を管理しなければならないことが問題にされたのだろうか？ 多数決法によってわれわれは自分の身体を管理するよう決定するのが政府の権利だと認めただろうか？ それでも今も女性達は選挙民を説得し、自分も投票して政府に布告をださせ、妊娠するかしないかをきめようというのである

改善は女性解放闘争に加増的な変化をもたらすだろう

が、抑圧からの全的解放をもたらさなければならない。女性は個人としても自己を解放することで、内部から革命を主導すべきである。それには女性同志の連帯、お互い愛しあうのが必要だ。女ひとりとして自分から始め、自分の生活を管理し、個性の多面性をすべて経験して、知性、創造、性生活を押し広げてゆくことで自己を表現しなければいけない。女は自己の内部から満足と解放を達成すべきだ。

ヨハン・モンハイト

— Shock 誌一九七三・八月号より —

〔資料Ⅳ〕

アナルコ・フェミニスト宣言

— わたし達とは誰なのか —

わたし達はアナルコフェミニズムが、マルクシズムのどの形態よりもっとラジカルで、世界史のこの時点で、究極のまた必然のラジカルな立場だと考えます。

わたし達は女性の革命運動は真似であってはいけないうのであって、男性支配構造の全足跡——国家そのもの——即ち古くからの嫌な刑務所、軍隊、武装盗賊（税金のこと）等、その殺人者の行為のすべて、奇怪で抑圧的な法制と

軍事的企図のすべて、個人の生命と自由に選択した共働的な試みに対し内的外的に干渉するものすべては、破壊しなければなりません。

この世界は「政府」と呼ばれる武装した男達の集団支配によって、更に数十年生きのびることはできないのが明らかです。状況は陰惨で、奇怪で、自殺的ですからあります。それを正当化するどんな形式をもってしても、武装国家は現在わたし達みんなの生命を強迫しているのです。国家はその個々の性質からして、真に革新する能力はありません。真の社会主義は、すべての人に平和と豊富をもたらすのですが、民衆自身によって達成されるのであって、国家の指示に同意しない人びとにすぐ銃を向ける代議員によって達成されるものではない。わたし達がこの病的な国家体制にどのように立向うかといえば、その最善の言葉は、⁽¹⁾「廃棄するのではなく生長する」ということでしょう。この過程は多くの事柄を伴うでしょうが、特にあらゆる人びとの間に教育とコミュニケーションを押しすすめることです。女性の知性はよくやく教会や合法的家族制のような男性の抑圧的創造物の重圧に思い至りました。今では男性支配の究極保塁——国家——を再検討するまでになったのです。

けれどもわたし達はそこでも他の競合思想体系と違う重大な差異を認めるのです。それは国家の諸悪を分析するにあたって、わたし達は分析を共産主義者と資本主義者の両国家に向け行わなければならないません。

わたし達は表現の自由の概念をテストしようと思う。というのはわたし達が信頼しているものは、本当に未来があるとして、その未来の人類において決定的な役割を果たすべき⁽²⁾社会主義婦人団体のイデオロギーに組み込まれるものだからです。

(3) わたし達はすべてソシアリストである。わたし達は多くのアナキスト思想家によって（アナキズムの）⁽⁴⁾同義語として用いられているマルキスト前期のこの用語を捨てることはしません。アナキズムの別の同義語はリバータリアンソシアリズムであって、国家主義者やその他の権威主義的な諸派に対抗するものです。アナキズムとは「ギリシア語のアナルコス——支配者不在——から派生」誰にしろ⁽⁵⁾力⁽⁶⁾の強迫によって他人を支配または抑圧しないことを意味する否定辞、即ち警告的な語で表現した人間の自由と尊厳を確認しているのです。アナキズムは人がお互いに何をしてはいけないかを提示する。他方ソシアリズムは、人がひとたび共通の利益、合

理性、創造性に基いて努力や資力を組合せ得るなら、すべて慣例の事柄は一緒にやれるとか建設することができるとの意味するのです。

わたし達はマルクス派の女性及び各地の女性に好意をもち、彼女達の建設的な闘争から離脱する積りはありません。けれどもその人達の政治運営が女性の幸福にとって古くさく、適切さを欠き、有害な際にはそれらを批判する権利を留保します。

アナルコ・フェミニストとしてのわたし達は、若し必要ならわたし達自身の思想・行動まで含め、すべてを絶対的に探究しまた挑戦する勇氣を持ちたいと熱望します。

— サイレント誌に掲載された宣言 —

〔訳註〕(1) "Perhaps the best word is to

outgrow rather than overthrow."

(2) "the coming Socialist sisterhood"

(3) We are all socialists. 原意は

はマルクス以前のソシアリズムを意味している。

(4) (アナキズムの)は訳者が挿入

(5) ...our own assumptions. 「わたし達自身の仮説(定)まで含めて」訳者の考えでは、思想・行動Vは唯一絶対ではなく、その構造からして仮説であり仮定であって、従って検討評価に耐えるものだとするが、ここでは仮説(定)だと誤解を招くので表記の訳を用いた。

〔資料V〕

アウトサイダーの アナルコ・フェミニズム

La Franchise (新聞)紙は「アウトサイダーの個人主義者ジャーナル」としてカナダ・ケベック在のステルネル協会から配布されている。宣言文ではアナーキストがアナキーに至る手段として個人主義、相互扶助主義、コレクティヴズム(集団主義)、サンジカリズムに別れるが、かような障壁は各人が真剣になって行動する時は容易に克服できるとする。また一九世紀末の社会分析に基礎を置く理論は政治・経済権力奪取の暴力革命を必要と理解したが、そしてその担い手をプロレタリアートとしたがにわかに成功しない。アナーキズム理論は

とだ。

「恋のために死ぬって? そう、精神が虚弱ならね。そうならば植人物人間さ。」

「愛だ、いつも愛だ」と人が言う。あゝ、梅毒が現実を思い知らせて呉れよう。」

「愛は盲目だ」と人が言う。何んだって人はそんなうさな臭いものから生まれるんだらう。」

「永遠の女性。なぜ男達のコミューンのように夭折しないのか。」

「男性は強い性だ。けれど女性の流し眼でたやすく参ってしまふ。なんと奇妙な強い性だことか。」

「老年夫婦のなんと幸福そうなことよ。男は幸福でつましく白髪だ。彼女は夜の営みを歌う魅力をもって老くる。自然はそんな不思議を秘めている。」

「貴方が好きよ」と彼女が言う。「ぼくもそうだ。」と彼が言う。女は自己満足をふくらませるのだが、男はそれを真実の情と理解する。」

「女は女同志では女で男の中では甘ったれた。つまり女の性は表面的だ。男の中では狼と一緒に吠える。」

「女は本質的に不合理だが、愛においては合理的だ。獲物を喰いつくすまでやめない。その結果喪服を着た未亡人になる。」

一九三九年スペインで終えん する迄ヨーロッパでは栄光の時をもった伝統がある。それで多くのアナーキストグループはそれらの理論を擁護しつづけているが現実の事象に何も影響していない。直接行動がアナーキズムの真髄なら、アナーキズムを擁護する最良の方法は、「各人が権威(当局)を考慮することなく、自己の世界のビジョンをもって自己の環境の中で生きること。さすれば多分退屈(アンヌイ)にとりつかれることなく、また英雄の役割をするとか、革命運動に献身して自由の救い主になることはないだろう。ネオ・アナーキズムは二つの重要な運動を行う。1.少数者の権利擁護、平和運動、女性解放運動支援、これらはそれ自体では新らしくないが世界のリベルテールの観念の基本である。2.現実と平行する社会を組織する。新しい価値を内部から創出すること。」としている。

しかし「女性の許へ行く時は鞭を持って行け」と教えたツァラストラやスチルネルの行動を学ぶためか、女性については見方が皮肉である。それはエスブリの現われとみられなくもないので以下警句風な文を訳出する。

愛について……(中傷)

「女が男にできる最大の裏切り、それが恋するということ

「女は男を語らずにいられない。男は女から離れ女に反駁する。まったく女性的論理だ。」

「何故詩人が作詞家になるのか。愛を繰返すから、いつも愛だけたから。これは愛が幻想なのを示すものではないだろうか?」

「恋は病だ。理性が主人にならない。人は眼覚めるところ言うのだ。「ぼくがあんなことこんなことをしたのかね」と。わがうるわしい理性が家庭料理の鳥の肉を賞美するとはなんたる不幸。けれど事情はそうなんだ。何事にも無誤謬はあり得ないし、そこから(誤謬)通れ得ないのだ。」

Association Max Stirner du Québec

C.P. 95, STN Place D'Armes

Montreal, P. Q. H2Y 3E6

〔資料VI〕

ラジカルフェミニスト

「現代のフェミニストの意識を十分に発展させると、それが必ずしも社会主義になるとは限らないが、共働すべき所は共働することが大切で、他方社会主義者も女に

は女としての被抑圧が存在するのを無視すると、その理論が理想主義やブルジョアイデオロギーに転落すると警告して、ジュリエットミッチェルは次のような表を示している。

ラジカル・フェミニストの意見	理論ソシアリストの意見
a、男は抑圧者だ。	a、男は抑圧者ではない。抑圧するのは社会組織だ。
b、すべての社会が男性至上主義である。	b、資本主義が女性を抑圧する。
c、それは心理的権力闘争から出発しー男性が勝っている。	c、それは私有財産から出発している。
d、社会主義がわたし達に提供するものは何もない。	d、われわれは社会主義との「われわれの関係」性をみつけたところだ。
e、社会主義国で女性が抑圧されている。	e、社会主義国での女性に対する状況は確かによくない。しかしその理由は女性解放が革命闘争の部分を成していないからだ。

f、わたし達の望みは、全女性が団結して男性と男性支配の社会に反対することです。

g、わたし達は男性の抑圧から女性を解放するよう希求する。

f、われわれの闘争の重要性を男性に確信させる必要がある。男性もまた彼の役割によって抑圧されているのだ。

g、すべて人民は資本主義下で疎外されている。われわれはすべての人を「完全な人間」に解放するよう希求する。

(Woman's estate by Juliet Mitchell PP94-95)

「次の一文は女史のアナーキズム評価である。」

アナーキズム

「経験的政治学」は、その個有な秘儀に分け入って以前の政治形式の再生を認めるようになった。例えばアナーキズムは六〇年代に全盛をみたのである。

アナーキズムはどんな組織（タテ階級と民主的なものを問わず）からも個人の自由を闘いとしてきたし、その無・差別運動では女性によい地位を常に提供してきた。個人についての過度なまでの信頼がそれを許したのだ。

一般人はアナーキズムを混沌だと思っている。だがそれは粗雑だ。けれどもまた個人の解放と個人の自由を強調する余り、その道筋で除魔になるものは何によらず打ちかかるという必然的盲目さがある。どんな政治体系だってそれが「体系」であればすべて同じように誤謬があるのだ。こうした考え方が女性に強くアビールするのは明らかである。女性は孤立した家族生活の中で私有され、個人的自由は努力すべき水平線とされているから……。アナーキスト用語での解放とは人間のあらゆる呪わしい精神からそれ自体の解放を意味している。だからこの必要性を女性ほど強く感じる者は他にないのだ。アナーキズムのすべてを無差別に取り込む状況が誰でも有資格者にし、対抗体系のものであれば何でも正当化するものである。そうならば全女性の抑圧全体に向けて動く必要とか組織は必要でなくなる。ウーマンリブ内の個人や少数グループの会員がやっているのは、この政治学の可能性テストである。確かにそれで女性がブルジョア社会の文化的規制から個人的に自由になっている。運動家達は勇敢で熱烈で他人の意見は気にかけない。その反面、別な言葉で言うところの本当のいい女性ということになりません。

1 同書 P 68 より

〔資料Ⅶ〕 中国のフェミニズム

（最後の文の「本当の女性」とは反語であって、個人主義の立場で書かれた The Female Bunch, 1970 Caroline Giccer 者を運動以前の時点のものとして批判している。因みにミッチェル女史はニュージランド生れ（一九四〇）現在英国でフェミニスト運動の著作活動をしている由だ。出典はベリカン版）

（現代中国を考える場合、毛沢東氏自身の思想と行動を第一義にするのは当然だが、次に彼の思想を実践化する上部構造としての党機関の活動、更に中国民衆の動向を考慮に入れなければならない。一九一九年（大正八年）五月四日北京に起きた抗日排日運動はそれまでドイツが租借していた青島（チントウ）を日本が要求して（第一次世界大戦に参加した日本の分け前）これに反対する中国知識階級、青年の抵抗であった。この五・四運動は、「新青年」による文学運動も含め思想的には西欧化であり、中国旧来の風俗・習慣・伝統の拒否、「民衆の中へ」の運動、中国近代化運動でもあった。しかしその中には中国共産主義の萌芽があり、中国が国としての尊厳を保

ち、世界に寄与するのは単に反帝国主義闘争にとどまらず、それ自体に価値があるとの認識が生まれたことである。当時二六才の毛沢東氏は最初の夫人の楊氏（Yang Chang-chi）の影響を受け「大公報」（Ta-Kung-Pao）に次のような女性解放論を掲載した。毛氏がアナキズムの影響を強く受けたのはこの義父によってであり、一九一八—一九一九年冬には李大公（Li Ta-Chao）の影響でマルクシズムに向ったと思われる。

参考：Mao Tse-Tung by Sinar

Schram, Pelican Books 1967

PA CHIN and his writings

by Olya Lang, Harvard University Press 1967

趙さん（miss Chao）の死

人の自殺は全く条件によって決定される。趙さんは自分の考えで死を求めたのだろうか？　そうではなくて本当は生を求めたのだ。趙さんが死なざるを得なかったのは条件が彼女をそこへ追い込んだのだ。趙さんを取巻いた条件とは、1. 中国社会、2. 趙さんの家族（長沙市のカンツィヤン街）3. 彼女が望まなかった夫の家族（長沙市カンツィヤン街）である。この三要因が金網となり

一種の三角形の鳥籠を形づくったのだ。一度この三個の金網がかむざると彼女がどの方面に生を求めても駄目だった。生きる道がなく、生の代りに死だ。そこで趙さんは死なねばならなかった。……もし三要因のうち一個でも鉄網でなかったら、または網の一個が開いていたらきっと趙さんは死なずにすんだろう。即ち(1)趙さんの家族が強要しないで彼女の自由意志に委せたら、彼女は死ななかった。(2)もし趙さんの家族が強要しないで、未来の夫についての彼女の意見を聞き、拒否する理由を説明させ、彼女の個人的自由を尊重していれば趙さんは死ななくてよかった。(3)もし彼女の家族と未来の夫の家族が彼女の自由意志を認めなかったとしても、社会に世論という強力なグループがあつて、彼女を支援したのなら、または両親の家から遁げだして、どこかに隠れ場所をみつけてもそれは立派な事であり決して恥ずかしいことではないと認める新世界が存在していたら、この場合も彼女はきっと死ななかつたろう。趙さんが今日死んだのは彼女が三個の金網（社会と彼女の家族それに未来の夫の家族）にきつく囲われたからで、生を求めて結局死にたどりついたのだ。……

昨日の事件は重大だ。それは取決め結婚という恥ずべき制度の故であり、社会制度の暗闇部、個人の自由意志

否定、人が自分の配偶者を選ぶことができないからだ。当事者達がこの事件をあらゆる観点から検討し、自分の愛を選ぶ自由のために犠牲となった女性の名誉を守るよう希望する。……

彼女の両親の家族と未来の夫の家族は社会に結びつけられている。両家とも社会の構成部分である。理解すべきは両家が一つの犯罪を犯し、その犯罪の原因が社会にあることだ。しかも有罪の大部は社会によって彼等に帰せられるのだ。更にもし社会が良い社会であったのなら、両家がこの犯罪を犯そうとしても、その機会はなかった筈だ。……

わが社会にある要因が趙さんの死をもたらしたとすれば、この社会は非常に危険なものである。それはまたChinさん、孫さん、李さんの死の原因に成り、男と女を同じように殺すからだ。われわれみな潜在的犠牲者だから、痛撃を受ける前にこの危険物に対し身を守らなければならない。声を大にして抗議し、まだ死なない人に警告し、社会の無数の悪を算えあげよう。

われわれが結婚制度の改革を擁護する運動を行うにあたっては、先づ結婚にまつわる迷信を打破し、特に結婚が運命によってきめられるとの信仰を打破しよう。これらの信仰を一度打破すると、その背後に隠れている、結

婚は両親が取決めるものというわがが解消し、次いで「夫と妻の不一致」が直ちに社会に立現われてこよう。そして夫と妻の不一致の考えが現われるにつれて家族革命が無数に起き、結婚の自由と自由恋愛が中国を席捲するだろう。……

自殺に対する私の立場はそれを拒否するにある。……先づ人間の究極目標は生を求めることだ。自己の自然傾向に反して死を求めてはならない。……第二に自殺は社会が人から希望を奪う事実で因る。が……われ等の失った希望を回復するには社会に対し闘争すべきだ……戦いのうちに死ぬべきである……第三に人が自己の生に勇気をもって結末をつける人びとを尊敬するのは自殺を賞揚するからではなく、自殺する人を勇気づけた「暴力に抵抗する」精神を尊敬するからである。……

自殺よりは戦いのうちに殺される方がよい。闘争の目的は「他人によって殺される」のではなく、「真の人間の出現に向け希求すること」である。もし人がそのあらゆる努力にもかかわらずこれが達成できないなら、死ぬまで戦い犠牲になることだ。さすればその人は最も勇気ある人として、その悲劇は多くの人の心をうつであらう

結婚に関する布告

封建制下の結婚は野蠻且つ非人間的制度であった。女性が蒙った抑圧と苦しみは男性より多大であった。労働者並びに農民の革命による勝利のみが、男女の経済的解放に引きつづき結婚関係に変革をもたらし、自由にしたのである。ソビエト地区では現在、結婚は自由に基いて契約されている。自由選択が結婚の基本的原則である。封建的結婚制度、両親が子供のために結婚を取決め、強制し且つ又婚姻契約に於ける売買は今後廃止する。

女性が封建のくびきから自由を獲得したとしても現在なお大きな肉体的跛行を受け（えば、纏足の問題）経済上の完全な自由は獲得していない。それ故離婚に關しては女性の利益を保護し、離婚によって生じる義務と責任の大部分は男性が負担する必要がある。

児童は新世界の主人である。旧体制では児童に対する配慮が少なかった。それ故児童保護に關する特別法を施行する。

本条令をここに布告し一九三一年一月一日より実効するものとする。

中央実行委員會議長 毛沢東

中国女性に労働力の広大な予備である。

共働体（Communities）を作りあげる前まではわが国の多くの地域で余剰労働力の問題があった。共働体が形成されて、多くの共働体は労働不足になった。そこで過去には田園にでて働いたことのない女性大衆に呼びかけ、労働戦線に就いて貰うことが必要である。これは多くの人にとって思いがけない重大な発展である。以前、人はよく言ったものだ。共働体ができたら必ず余剰労働力がある。「もう既に大きな労働力がある。この上余剰労働力があつたらどうしようか。」多くの地域で共働体が実施されると、この不安は解消した。——実に多くの地域で生産規模が拡大され、活動の種類が増加し、自然の収用分野が拡がり深まった。そのため労働は上手に行われ、労働力の欠乏が感じられていた。この条件は現在始まったばかりだが、将来は年を追って発展するだろう。同じことが農業の機械化後にも起るだろう。未来は人の夢想もしない各種の事業が創出され農業生産高は現在の水準の数倍、数十倍、数百倍になる。工業、輸送、交換手段の発達にはわが故人の想像をはるかに凌駕したものである。科学、文化、教育、衛生も同じである。中国女性に労働力の広大な予備である。強力な社会主義国の建設闘争にあたってこの予備に手をつけ活用しよう。



出版: The Political Thought of
Mao Tzu Tung by Stuart R.
Schram PP334-339

〔資料Ⅳ〕 中国の半身

（新中国の農村における革命についてフィールドリサーチ（現場検証）した優れた記述は多いが、その一つにウィリアム・ヒントンの「翻身」（解放）がある。一九四八年以来の「長い弓」村での変革を描いた、著者によれば「中国農村における革命のドキュメント」だ。そこで土地解放と同時に女性解放が行われたが、その問題点と至難さを次の記述からみてみよう。時の経過はあるにしても基本的な事柄は変らずむしろ現代中国の女性解放の出発点とみられるからである。そしてそれは何より貧農女性自身の手によって進められた所に意義がある。）

：長い弓村（原著者は「張」の一字を分解してこの村の

名としている）の幾人かの貧農女性、指導的革命派の妻達は早々と女性連合を組織した。ここでは男達に束縛されない勇ましい妻や嫁が裏切者に反対する声をあげ（解放前国民党軍に協力・搾取した地主とその取巻き連を告発したこと）貧しい妹達にも同じようにするよう勇気づけ、こうして全村の力を結集して「中国の半身」の力にしようとしていた。その呼び名は啓蒙された女性達が好んで自分達につけたものだった。「苦しみを思い出すために苦しみを語ろう」女達は男以上に苦しんでいないにしても同じだけ苦しんだのであり、公開の場で発言できるなら父や夫と同じだけ裏切者を告発できると思ったのだ。

しかし女達が自分達の間で組織を作り、集会に出席し公的生活に入るようになると、男達からの反対が更に多くなり、特に自分の家族である夫からのものがひどく、夫達は妻や嫁が家の外で活動するのは「すぐ私通への道につながる」とみたがるのだった。家長達は相当な穀物を支払って女達を買ったのだから、家財とみなし、女は一生懸命働き、子供を産み、舅と夫と姑に仕え、話しかけられた時だけ話せばよいと思われていた。この雰囲気の中で、女性連合の活動は多くの家族内に家庭争議をこしらえたのだ。夫が妻の外出に反対しただけでなく、舅

と姑が強烈だった。多くの若妻はそれでも集会にてで、家に帰ると酷く殴られた。

そうした殴られ組の一人に貧農マンツァンの妻がいた。彼女が女性連合の集会から帰ると夫は当然のように殴り「俺が家に居つけるよう教えてやる。お前の悪いやり方を治すんだ」と喚いた。だがマンツァンの妻は夫を驚かしたのだ。従順な家財として家にいる所か、次の日、彼女は女性連合書記、活動家タンハンの妻を訪ね、主人に対する苦情を申出た。実行委員会で委員達の討論の後、書記は全村の女性集会を呼びかけた。13乃至半数が集った。この前例のない決意の固い女達の面前で、マンツァンは自分の行為を説明すべきだとの要求を可決した。マンツァンは敵意をむきだし、屈せず直ちに応じた。彼は言った。妻を殴ったのは集会に出たからで、「女が集会に出掛けるのは恋愛遊戯と誘惑を大っぴらにやろうとするのがその理由だ。」

彼と向いあった女達から激しい抵抗が起きた。言葉は行為になった。四方から彼に襲いかかり、蹴倒して衣服を引裂き、彼の顔をひっかき、髪の毛を引っばつて息が止る程ひきつり廻した。

「まだ殴るつもり？彼女を殴るのは私達みなを侮辱することよ。おっ母さんと寝ればいいのよ。これで判った

でしょう。」

「やめて呉れ、二度と殴らないよ。恐怖に打ちのめされた夫は気絶寸前であえぎながら答えた。

女達は攻撃をやめ彼を起して家へ帰した。但し、妻に指を触れたら同じ「療法」をもっと加えると警告した。

その日からマンツァンは妻を殴らなくなった。またその日から彼の妻はマンツァンの氏をつけないで娘時代の氏名、チェンアイレンと呼ぶようになった。……（中略）
〔愛人は現在夫と妻の両方の呼びかけに用いられている。訳註〕

チョ・チェン・フーは「勘定をしめる」（農地解放のこと）につづく分配によって土地と家を初めて獲得した赤貧の農夫だった。その土地と家で妻をめとることもできた。仲介者を通して一〇才若いもと傀儡兵士の未亡人と一緒にになった。多分この年の違いからチェン・フーは嫉妬深い夫になった。少しでも妻が自分の眼の届かない所にいるのは我慢できない。それでいつも喧嘩だった。問題の解決のために殴った。彼女は気丈な女でチェン・アイレンの場合と同じく女性連合へ訴えた。チョ・チェン・フーには殴る蹴るの仕返しに彼の許へ代表を送った。そして女達は、貧農が妻をめとるのはどんなに難しいか思い出させた。だから一度結婚したら妻を尊敬しな

ければいけないのであって、我慢して過ちを克服するよう手伝うべきだ。特にこの場合、妻の方が若いのだから……。それに殴ったりすると夫を嫌うようになるだけで、二人の関係は悪化し、彼女が離婚を請求するだろう……。もしそうならば妻を失うことになるのだ……。チョ・チェン・フーは離婚の考えは好まなかった。そこで妻にやさしくすることにした。その後、戦場の後方で働くようになって、彼は字の判る仲間に助けを借り、女性連合へ手紙を書いた。それは形式張ったものだった。「私が家を離れて、何度も考え判った事は、貴女方が兎角私共を助けて下さったという事であります。今の私に判ったのは、お互いの愛情を尊敬によって、夫と妻は一緒に幸福な生活をしてよい生活を築くことができるのです。」

かような活動の結果によって、女性に平等を得ただろうかとの問いに、連合の指導者の一人は答えた。「いいえ、まだです。事情は以前より少しくなりました。けどまだ殴打事件があり、多くの男達は女の言葉を軽蔑し、女は役立たずと思っています。平等を勝取るには長い期間闘わねばなりません。私達に土地があれば相当助けになります。以前男達はよく言ったものです。『お前は生活を俺に頼っている。お前は家に居て俺の稼いだも

のを食べていればいいのだ。』けど女達が土地の分配を受けた後では女はこう言いかえすのです。『この穀物は私の土地から取ったものよ。私だって貴方なしで自分の労働で生きて行けるわ。』土地での労働ということになると、例えば女は弱くても男と同じくらい懸命に働きます。耕す以外は何でも出来ます。くわを使うのだって男程早くないにしてもやれるのです。たゞ車は引けません。でもやれるようになるでしょう。もっとも家畜のあるものは手馴れるのが容易ではありませんが……。」（中略）

この女性連合の目標が女性の平等だけだとするのは一面的であろう。社会の変革が成功し、土地の改革が完了し、国民党軍の挑発に対し解放区の勝利なくしては女性解放を語っても無駄である。多くの女は直感でそう知っていたから、女性連合を革命後のあらゆる分野にむけ女の力を動員する機関にしたのだ。連合によって文字の学習会、政治研究会を組織し、綿器具を使つてはた織りや糸くりを覚え、兵士達の制服や靴を作る共同作業をした。妻や母親は夫や息子それに兄弟が（解放）軍に入るようすすめたのである。

「こうした活動のすべては平等のための闘いに緊密にむすばれ、女が最早、家財として取扱われるべきでないとい

の要求になった。もしこの要求が男達を驚かせたとしても革命の目標に与えた女達の支持によって男達は納得し讃嘆したものである。男達の心の中には、「中国の半身」の助けがなくては勝利できないのを認めなければならなかった。

訳出: FANSHEN by William Hinton
Penguin Books PR184-188

あとがき

ブナルコ・フェミニズムという聞き慣れない用語とその内容を扱うのは、周囲からの違和感による反撥やさし迫った問題意識になり得ないうらみがありました。けれど主題として重要なのは勿論であり、資料からみてその現実と可能性はそれを担う人達—特に女性の側の主張、運動として存在しているのです。幸いフェミニタンを主催しているラリー君が一般的な要約を寄稿して呉れた。彼の所論はまだ長文で紙面の都合上割愛しましたが、要は女性の男女平等についての主張が真実なら、米国においては女性にも徴兵があつて然るべきで、男子だけがベトナムで戦うのは不当だとして裁判に持込んだ事例をあげています。だが総体的にみればラリー君の説は女性だ

けの運動としてのリブを戒めているのであって、フェミニズム運動では男女の共働がなければならないとする所に彼のフェミニスト振りがあり、革命の前衛としてのプロレタリアート独裁から離れてフェミニストを前衛に置き代える点、地誌的に北半球と南半球の革命後の世界へ向け思索の鍾を降らし、ウパニシャットの用語を使つての解明等は彼の真骨頂であり、その可否を別として聞くべきものがあります。今回の寄稿については何度も訪問を受け、解説を施して呉れました。なお高木さわこさんはラリー君と共働してフェミニタンを運営、最近では（五月二十二日夜十時）NHKの視聴者の作る番組「男への三下半」の司会をしました。さわこさんは今度の「狼」グループについてマスコミが女性活動家達をあつかも男性にそのかされて主体性のないまゝに行動したかのように取上げるのは許せないと公憤を洩しています。所でわが陣営のモイゼさんは女性運動は社会主義運動の中で平等の賃金、社会的地位の向上を獲得してきたしこれからもそうあるべきだとの説を述べました。その範囲で解決される問題は多いと思うが、男の役割、女の役割に関して検討が不十分なようです。男はどのように女を推定しても或は想像力で包みこんでも包みきれない何かが残るのであって、これまでのように社会主義運動を

進めてきた組織はそれ自体、女性を補完的にしか組入れてこなかったのですから、それは資本主義機構が家父長制の秩序の下に女性を商品化する程墮落していないにしても、個性尊重の名目の下でやはり男性と等しい能力を持つことが求められ、その結果、社会主義運動で頭角を現わすには主義主張で男性の用語を使い、しかも女性の問題をも扱わなければならないという二重の負担を背負ってきたのです。婦人運動で活動した女性達がエリートになるのはその属する組織や運動の過程が作りだすというより、むしろ彼女達が働かかけた社会制度の側に素地があるのであって、翻ってそれだけ体制の側に取込まれているということになるでしょう。

今回は米国のベニー君のお蔭で「つむじ風」グループと接触ができた資料の提供を受けました。それぞれの組織について、やるべき運動としての情報活動について宣言を寄せ集めた結果になりましたが、いづれも出発点を明らかにしたのであって、その可能性は時間を貸さなければ明瞭にならないでしょう。現に一年の休刊後再刊した「つむじ風」はアナキスト女性の文芸誌として再出発すると述べています。（六月四日発信の11号）住所は次の通り

Whit I wind
3216 N. California
Chicago, Illinois 60618

さて資料の中に毛沢東氏の若い日のエッセイが挿入され不審に思われる向きもあるうかと思うので釈明します。新中国の女性解放運動は現代史の中で最も苛烈なものの一つです。その理由は三千年来、彼地の伝統として公的な女卑の風習と大家族主義があります。烈女伝（一二一四年頃の作）によれば婦人は「少にしては父母に従う、嫁しては夫に従い、夫死しては子に従う」とあり更に離婚条件七箇条とは女性の性癖にまで及び「嫉妬、みだりがましくよこしま、盗み癖、長いおしゃべり、おごりあなどる、子供のいないこと、悪い病氣持ち」の七点の欠陥があれば離婚の対象になりました。（引用・烈女伝・荒城孝臣・明德出版）今これらの条件がわが封建的女性観にどれだけ影響したかは別として、一九二〇年代の五四運動では女性自身による権利闘争が生まれたのです。

（例、五条運動・遺産相続における平等権、投票権と公務員に選ばれる権利、教育を受ける平等権、労働平等権、結婚における自由選択権）中国の新女性はいくつかの纏足（女児は幼児期から足首を布で縛り、房内より出さないよう躰けられていた。美意識の強い作家例えば郁達夫はこれを次のように評価している。「（老二）二番目の娘の脚は既に廿幾才にして二つの肥えた小さな脚で、十一・三才の少女の脚と同じ様で、これは彼女が絲襪（絹

靴下)を被き、その為彼女の脚は肥えて柔らかで、脚の先端は極く細く、後に肉厚の脚でこれがいづも私の幻想の中心を占めていた。過去より、なおこの風習は一九四八年に終わった。翻身の著者ヒントンが述べている。からの自由と親の取決めた結婚からの自由であった。この脈絡に毛氏の若い日の一文を置いてみると彼が趙さんの自殺を補助したものとして1.中国の旧社会、2.彼女の両親、3.彼女の未来の舅姑の家族を非難の対象とし、それを温存する四箇の網として、政治、閥、宗教(儒教が含まれる)男性を凝し、これを打破るものとして共産主義革命を想定したのが判ります。シェイラ・ローボサムの「女性達、抵抗と革命ーペンギン版」に依ると「趙さんの絶望的な状況に対する毛の昔からのイデオロギー的公憤は継続している」とみています。それにしてもこの時代の毛氏が女性の結婚における選択権を「自由意志」に求めているのは興味深い。人間の自由意志こそ近代アナキズムが標榜したものであって、フリーエ、ゴッドウィンは実にその先達でした。(私の視点は毛氏を一箇の革命思想家としている。)自殺に関する彼の意見は戦闘者の心懸けであって人殺るか殺られるかVの択一にあたって、少くとも殺られる前に殺る方なのでしょう。三〇年代以降の布告はフェミニズムが政治綱領になった

事を示すものです。それと同時に民衆の側におけるその定着過程と反撥を示すのが「長い弓村」における事件だと理解します。現在は資本主義国、社会主義国、それに第三世界の諸国とを問わず、真の女性運動はそのテーマが何であれ、一定の限度を越えたと迫害を受ける環境にある。既に女性の参政権、就職の機会、教育の機会均等の権利は明文化されてもいる。しかし性にまつわる多くのタブーは依然として不問のままであり、近年、僅かにW・ライヒの労作で覗く知るだけです。アナキストは女性の解放であると定義した。個性の伸長が女性の解放につながることも理解した。ではその為に何をすべきかエマ・ゴールドマンは女性の愛する権利、母性の権利を擁護した。(参照「女性解放の悲劇」)わが高群逸枝の出发点も基調において同じです。(参照「女性の歴史」)たゞ奇怪なのは彼女の人類学的歴史学的考察を形づくった情念はアナキズムのそれと同根でありながら、参照はいつもモルガンであり、エンゲルスだ。振巾の大きい書き手でそれだけに知ってか知らずしてか政治的含みのある発言をしたのでしょう。或はこれが政治意識をもった女性の一つの生き方であったのかも知れません。いづれにせよラリー君が好んで言うように八本当のフェミニストはアナキストVだとの発言を信用して、これから

アナルコ・フェミニストが生まれるなら、これを企画した者のひとりとして望外の喜びです。ーはしもとー

〔お詫び〕

6月号は6月中に発行しなければいけないのですが、何分原稿が多く、製版の手違いがあり遅れました。巻号数は順次追って行く予定です。よろしく。

☆草浦公英さんへ：リベルテール2月号所載の「アンリ・ネル友の会」の名称につき疑問として「アン・リネル」ではないかとの問合せを見ました。人名の訳はむづかし、石川さんのディナミックではアン・リネルでした。しかし綴字はアンリ・ネルとも読めますので、本人は署名に両方を使っていたと判断します。いつからアン・リネルになりアンリ・ネルをやめたか訳者は現在の所調べつくしていません。(はしもと)



*以上 バルカン社撮